

## 朗読研究会と朗読論

小櫃万津男

坪内逍遙が新劇運動の前段階の研鑽手段として、また将来の文学的脚本が上演されない場合の代替手段として朗読研究会を興したことはよく知られている。しかしこれに伴って起った朗読論や朗読論争を史料によって専門的に論じたものは未だないようである。そこで本稿は東京専門学校時代の早稲田に起った朗読研究会を契機として生まれた朗読論や朗読論争を史料によって掘り興し、その理念や意義を探りたいと思う。

朗読研究会の試演会が行われたのは、河竹繁俊、柳田泉両氏著『坪内逍遙』（昭和十四年五月二十八日、富山房刊）に依れば二十三年十一月十四日、東京専門学校大講堂に於いてであった。もっともこの時は関根正直の主唱で逍遙は賛助したのみであり、具体的には

正直が謡曲「鉢の木」を朗読したことしか判っていないという。

翌二十四年二月十五日には饗庭篁村も加わり、学生有志も交えて、篁村作の史劇「太田道灌」おほただぐわんを朗読した。このような朗読研究会の具体的活動に伴って、朗読論もまた起こって来るのである。

### (一) 朗読論争と鷗外

最初の試演会が行われた翌々月の、二十四年一月三日発行『國民之友』第八卷第一〇五号に掲げられた「饗庭篁村」の「讀よかた」は、このような脚本朗読の気運に乗じて生まれた朗読論の最も早いものである。もっとも森鷗外が「演劇場裏の詩人」と題する講説を行った中で朗読の事に言及している。ここでは「讀曲」という用語で常声、レチタチオン、デクラマチオンの別のあることを説き、朗読のドイツでの例を紹介し、外国の劇を翻訳しても上演に至らない場合の

代替手段としてゐる。それが今回は朗読が実際に行われ、そうした気運に伴って起こって来た朗読論であるところに意義があろう。

さて「讀<sup>よ</sup>かた」の内容は次のようなものである。

源氏物語を読むにも、詞<sup>ことば</sup>と地の文をよく分けて区切よく読めば無量の味が出てくる。戦記ものを読む時は声を張り勇ましく、馬琴、西鶴、種彦、春水それぞれに読み分けてこそ書中の妙味が解せられる。小説、院本、戦記ものは皆この心得がなければならぬ。芝居道にも本読ということがあって、宝曆、明和、天明には本読会というものがあつた。本読のうまい狂言作者が居て、今一工夫して書き改めるように注文された他の作者の脚本を、実際には改めないままその翌日本読し、別物のように面白く思わせて役者たちを納めてしまったことがある。わが友関根正直氏も読み方の大切なことをいい、既に華族女学校に読み方の課を設けて自分で教師となつて著しく成功し、

また同感の友人を會して讀<sup>よ</sup>くわい會を催し文學上に一

の新模様を出さんの企てあり

そして

我輩も十年ばかりさき高島藍泉氏山田風外氏などに院本讀會を企てんことを謀りしも障りありて果さゝりしが今や讀<sup>よ</sup>みかたの事につきて世間や論ずる者あり既に關根氏の如く實地に修行せらるゝあり同好の諸君イザいかに讀會を尚ほ外に催されては以上が篁村の「讀<sup>よ</sup>かた」の概要である。

この論説の意義は、脚本を含む文学の朗読がその味わいを深めるということを指摘している点である。芝居道に本読があることは周知のことであるが、ここに述べられているエピソードによつても知られるように、それは上演脚本の内容を俳優に理解させるための方便であつた。学海が自作の脚本の朗読會を催したことは拙著『日本新劇理念史 明治前期篇』（一九八八年三月二十五日、白水社刊）に詳述したが、この時も事情はほぼ同じで、出版前に批評を求めたのであるから、その内容を理解させるための朗読であつたことは明らか

かであろう。それが今回は、朗読によって脚本の味わいを深めるといふ理念にまで進展した。そこに理念史的意義が認められる。

なお関根正直の企図は脚本朗読ではなく文学一般の朗読であったらしいが、朗読によって内容を深く理解させるという目的は同じであったであろうことは、篁村の紹介の姿勢から察せられるであろう。

このような朗読の新気運は、しかし世間にすんなりと受け入れられるという訳には行かなかった。

篁村先生の讀方説國民之友に出づ流石細き心くわんそんせんせいよめたはせつくみんのともいひさまがこまかこころ 附つきれども元來讀方もとくよめたハ讀者とくしやの研究けんきうまべきものにあらきて筆者ひつしやり自然しぜんに之これを感かんぜしむるものなりと我われハ思おもへり先生せんせいの説せつの如ごとくせしよば書よを讀よむ者ものハ一旦いつたん先まづ講かう釋しやく師しとさるべきなり(二十四年一月二十九日付『讀賣新聞』第四八九四号、「一浪士」筆「大いに笑ふ」)

という意見は、ほんの一寸皮肉ってみたといった体のものであるが、次に示す「咄々生」の投書は、ある種

の世間の反応をかなり代弁しているものと思われる。二十四年二月十二日付『讀賣新聞』第四九〇八号に載ったもので、題して「文學亡國論の口實こうじつとさる勿なれ」という。

東京専門学校では、近々朗読会を催して饗庭篁村氏の新作院本「太田道灌」の読み方を試み、次第にいろいろの院本、物語などに及ぶ計画があるという。西洋諸国では烈士雄弁家の演説は情夫をもふるいたたせるといふ。ところがわが国の文学界の一種卑猥な氣風がはびこる中で、専門学校文学科がその防腐剤の役目をせず、

猥鎖わいさ柔弱じやうじやく的文學餘燼ぶんがくぐんを拾集しゆくして朗讀會らうどくかいを催もはさんとさるハ抑おさも何等なんらの好事こうじぞ若もし夫れ院本いんほん若わくハ物語ものがたりの讀み方よかたにして一變べんせべ忽たちちにして彼の芝居道しやいどうの讀み本よほんとより更に一變べんせべ彼の猥卑わいひの卑ひさる聲色こはい遣ちやひとより終おほらんのみ文學者ぶんがくしや中活眼ちゆうかつがんの士しとせしとせし何んぞこの婦女子ふぢよし的風流的ふうりてきの餘興よこころを棄そて眞成しんせいの朗讀法らうどくほふを實行じつかうさるの志こころざし ちぎや

以上の咄々生の論難に対して「東京専門學校 文學科一學生」という匿名の投書が寄せられた。それに対して再び咄々生が答え、更に当事者たる篁村が弁明するなど、ここに朗読論争が起こったのである。

先ず文學科一學生の反論は、二十四年二月十五日付『讀賣新聞』第四九一一号に載つたもので、「咄々生の無識を憫む」と、センセーショナルな標題となっている。

一淫靡の文學ぶんがく、或あるひ社會の淫靡いんぴを助たすけることあるべし然しかれども高尚かうかうの文學ぶんがく、社會の惡弊あくへいを掃き洗せんするに足たるや明あきらかり咄々生とつとくせい、専門學校せんもんがっこうの所謂文學せいふぶんがく、此高尚このかうかうの文學ぶんがくたるを知らしる

一泰西たいせいの朗讀法らうどくはふ、主として「ドラマ」若もしく「ドラマ」的てき文章ぶんしょうを臺本だいはんとき咄々生とつとくせい其一端たんたんを知りて其本旨そのほんしを知しらまき

一日本外史にほんがいし、史記等しきとう、我所謂朗讀法わがいはらうどくはふを以て朗讀し得うらるべきものにあらまき之これを要ひするに咄々生とつとくせいの素讀法そどくはふと我所謂朗讀法わがいはらうどくはふとの區別くわくべつを知らしる

一咄々生とつとくせい又曰く朗讀法らうどくはふ一變べんせバ芝居道しばいどうの本讀ほんよみとちり假聲こゑとちらんと嗚呼あゝ何者なにもの一變べんせバ邪道じやどうに陥おちらざらん

一林檎りんご一つも見様次第みやうじだい多おほし淫靡いんぴする小説物語せうせつものがたりも教授法けうじゆはふと感得法かんとくはふとに依りて利害りがいを異ちがへにま教授法けうじゆはふにして宜よろきを得うべ淫靡いんぴする小説せうせつを朗讀らうどくするも何なんの妨さまたげある況いはんや已まに演藝協えんぎけい會かいにて可認かにんしとる高雅かうがの新戯曲しんぎきよくに於てをや咄々生とつとくせい未だ一回も朗讀法らうどくはふを傍聽ぼうていせまして譏そしる出放題でうはうだいも亦甚またはなだしたと云ふべし

以上の一學生の反論に対して、「咄々生」が再反論を寄せた。二十四年二月十六日付『讀賣新聞』第四九二二号所載、「専門學校文學科一學生の無識を憫む」がそれである。

一文學家ぶんがくかの手段しゆだん、衆愚しゆぐの歡心くわんしんを買かふに在このゝり是故このゝに文學家ぶんがくかの風かぜを聞きくもの廉れん夫ぶをして貪あらあらしめ勇夫ゆうふをして懦おとさらしむ是れ大おほに名教めいけうに害がいあり

一泰西たいせいの朗讀法らうどくはふ、主として「ヨレーシオン」若もし

くハ勇壯する「ドラマ」を臺本とモ泰西の朗讀法ハ唯單に「ドラマ」のみと爲せハ蓋し朗讀法の本旨を知らざるもの言なり

一若し果して院本を朗讀せざる可らざれば宜しく院本中の上乘たるもの擇ぶべし而して「太田道灌」ハ院本中の上乘たるものにあらず然るに専門學校文學科生徒の特に之を擇ぶを見れば其見識知るべきより否寧ろ憫むべきなり

以上が咄々生対東京専門學校文學科一学生との論争の概要であるが、更に当事者たる「饗庭篁村」の弁明が、今度は『東朝日新聞』に載った。二十四年二月十七日付、第一八六三号で題して「國文朗讀會」という。

篁村は読方の大切なことを思って二十四年二月十五日に朗讀会を開いた。これはわが国には読法というこの確かな法則がないので、いかにしたら文学上の滋味を増すような読方が出来るかという相談会であった。これについて逍遙は、

讀法に默讀。素讀。朗讀。活讀の四あることを述べ朗讀活讀（活讀とて身振手眞似をなし俳優の臺辭を眞似んとにハあらず重盛より正成なり其人其時の精神風土主言句の間にあらはれ恰かも其所に活動するが如く讀むを云ふ朗讀とハテニヨハに注意し地の文と詞を分け句切段切をハツキリして讀むを云）の文學上に大効益あること五ヶ條を説かれつひに朗讀中に活讀を加へて試みんといふに決し

た。そして「太田道灌」を朗讀した。この自作を選んだのは読方研究に適當だとしたのではなく、参加者各自がその脚本を手にする必要から摺物のあったのを幸いこれを仮に用いただけである。それなのに咄々生という人は事情をよく知らないで取越苦勞をしている。讀法研究會ハ俳優の臺辭を眞似る趣意にあらねバ其の心配を止められてよ

以上で朗讀論争は一応終つたのであるが、この論争の勝負を判定した論者があつた。それは他でもない、

何事にも一言無しでは済まされない鋭敏の論者、森鷗外であった。二十四年三月二十五日発行『文學志からみ草紙』第一八号に載った「朗讀法よつきての争あそび」がそれで、署名は「森林太郎」である。

東京専門学校文学科一学生と咄々生の間に論争が起つた。註(一)そもそも人の言語に美醜があるが、醜なるものを美とするには、「ギョオテ」によれば、地方訛を棄てること、発音を正しくすること、程よく文の抑揚を顯わし情に制せられないようにすること、自分を書中の人物の地位に置いて文章に表われた情を思うままに発動して読むことである。以上の段階を踏んで修行をつめば平常の言語を美しく出来る。

おほよそものを讀むに、音の抑揚つゆばかりもなきを、純粹なる素讀すよみといふべし。

そして、

この尋常素讀 (T.essen) をして靜より動に入り、冷より熱に入らしむるものは情なり。さてわが讀める文を人のこと、思倣して、人の情を汲取りてい

ふやうなる心とあるときは其情尙弱きゆゑに、讀む人情ひとじやうのために制せらるゝ憂なし。此かくの如きよみ方は、西洋文法家の語にていはゞ、いつも三人稱の事をいふ心にて做得べし、即ち我事にもあらず汝の事にもあらぬ彼の事かれをいふ心にて做得べし。これを「レクタチオン」(Recitation)といふ。若し此情強くなるときは、遂に言語を左右するに至る。書を讀む人、我性を忘れて、身を書中の人物の地位に置き、其情の動くに任せて言語を出すこと。俳優が場じやうにのぼりて技を演わざずるをりの如きは即是なり。これを「デクラマチオン」(Deklamation)といふ。「レクタチオン」の三人稱は「デクラマチオン」にて一人稱となるなり。彼かれは我われとなるなり。要するに「レクタチオン」は進みて「デクラマチオン」になるべきものなればわれは其區別をおもに量別に在りといひしなり。

東京専門学校の朗讀法はこのどちらであろうか。

われは明に知る、東京専門學校にて行ふ朗讀法

の「レチタチオン」となるべきことを。

咄々生は専門学校の朗読法の一変して芝居道の本読となり、再変して声色遣となるであろうことを憂えるというが、

朗読法は「レチタチオン」なり、本讀も亦「レチタチオン」なり。朗読法はとりもなほさず本讀なれば、朗読法の本讀となるには、一變するまでもなし。咄々生は芝居道の本讀といふものを一種卑むべきもの、やうにいひしが、こはまだ芝居道の (Schau=spielkunst) 土君子の行ふことを得べくなりたる盛時に逢ひしとなき邦人の常情を脱せざるためのみ。朗讀法其物は美はしく讀む法であつて、

縦令劇の脚本につきてこれをなしたりとも、何の不可なることかあらむ。

咄々生のいう再変した朗読法とは、蓋「デクラマチオン」なるべし。こわ色つかひは實に「デクラマチオン」の摸倣なり。

咄々生は声色遣いを卑猥と罵つたが、その道理は朗読法にも本読にもデクラマチオンにも関せず、

その猥の猥、卑の卑なる道理は、摸倣の性質より生ず。

学海、黙阿弥らが脚本を作つて、公衆に対して読めば「レチタチオン」であろう。それが俳優によつて上演されてせりふとして話されれば「デクラマチオン」であろう。何れも少しも卑猥ではない。声色遣いは俳優の口吻を真似て人の喝采を博しようとする。

この摸倣の卑しきは、決して朗讀法と「デクラマチオン」との卑しかるべき證に充つべからず。次に朗読法の材料について述べよう。思うに、

尋常の素讀までは、おほよそ文字に書きたるもの悉く材料とすべけれど、「レチタチオン」即ち専門学校の所謂朗讀法に至りては、情に關するものにあらずは、不可なるべし。情に二つありて、一は實感一は審美的感なり。

前者の材料は、主に咄々生の尊ぶところで、古烈士

の談、昔の雄弁家の演説などである。後者の材料は、専門学校の取るところで

叙情詩、叙事詩小説（源氏物語）、戯曲（近松が淨瑠璃）など皆是なり。

専門学校が詩の中で特に戯曲を取ったのは、そもまた故あることであろう。

「デクラマチオン」の材料となるべきものは、唯戯曲あるのみ。戯曲は文法家の所謂三人稱を交へずして、文をなせる唯一の詩體にして、「デクラマチオン」の法たるや、基本質として三人稱を交ふべきものにあらざればなり。そして、

専門學校は其生徒に教ふるに、言語の抑揚の間に情を顯はすことを以てするものなれば、其情を顯はす法を極端まで發揮するに適したる戯曲を取來りて、其練習の材料とせしは、固より怪むことを要せず。その饗庭君の「太田道灌」を取りしは、朗讀法の師たる君が平生尤熟したる曲なればさもあるべき事な

り。

以上が鷗外の「朗讀法よつきての争あらしむ」の概要である。

先ず篁村、咄々生、一学生の論争について判定をつけて置きたい。先にも述べたように、篁村の理念は脚本を含む文学の朗讀がその味わいを深めるということを指摘したところに意義があつて、特に優れた理念ではないにせよそれ自体非を唱えるべき点はないといえよう。

それに対して咄々生の主張は朗讀否定説に初めから立っていて朗讀といへば卑猥な声色違いかと一方的に決めつけているのであるから暴論に近い。篁村のいったことなど少しも理解していないといつてよい。

次に一学生の主張であるが、「朗讀法一變せバ芝居だうほんまの本讀とちり假聲とちらんこはいろと嗚呼何者あゝ、ちにもり一變せバ邪道じやうちに陥おちらざらん」と述べて、咄々生に対してその一方的決めつけに反論しているところは、充分反論たり得ている。一変した事実に対していうのではなく、



「一變せバ」と仮定の上で非難している咄々生の弱点を衝いたものといえよう。同様に「一回も朗讀法を傍聴せきして譏る」咄々生を一学生は難じているが、これも事実によらない咄々生への充分な反論となり得ている。

要するに篁村・一学生対咄々生の論争は咄々生の完敗である。このことを一層明確にしたのが鷗外である。鷗外はおよそものを読むに素読とレチタチオンとデクラマチオンの三つの方法があることを諄々と説く。レチタチオンを三人称の心、デクラマチオンを一人称の心で読むものとし、専門学校の朗読法も劇界の本読も共にレチタチオンであり、本読を卑しいもののようにいうのは、演劇が士君子の行い得るようになった盛時を知らぬ者であると咄々生に教える。声色遣いはデクラマチオンの模倣であるが、それが卑しいのは朗読法にも本読にもデクラマチオンにも関係なくそれが模倣だからであると更に教える。そして専門学校の朗読法であるレチタチオンは情に関するものでなければなら

ないであろう。情には実感、審美的感がある。前者の素材は咄々生の尊ぶ古烈士の談、昔の雄弁家の演説であり、後者の素材は専門学校の取るところで叙事詩、叙事詩小説、戯曲であると分析する。そして専門学校が戯曲を取り上げたことを情を表す法を極端にまで發揮するものとして支持するのである。

実に見事な分類、分析であり咄々生の誤りを正すと多大であったといわざるを得ない。先にも述べたように鷗外はこれより約一年前の二十三年の二月の「演劇場裏の詩人」に於いて、常声、デクラマチオン、レチタチオンという用語でこのことを説くことがあったが、今回は朗読論争の判定役としてより優れた分析を行っているところにより高い理念的意義が認められる。そしてそれが論争によって引出されているところにこの朗読論争の理念史的意義も認められるのである。

## (二) 逍遙の朗読論

ではいよいよ本家本元の逍遙の登場である。彼の朗読論は題して「讀法を興さんとする趣意」といい、二十四年四月十三・二十三日発行『國民之友』第八卷第一一五・一六号に二回連載された。署名は「坪内逍遙」である。

人は思想の動物であり、他人にその思想を表現しようとする欲望のあることはその天性である。この思想を他人に伝える方法は「著作」と「話説」の二種がある。話説は本題の外なので著作について説く。

上古は印刷術も行われず料紙さえも乏しかったので、著作があってもそれを他に伝えることは大変難しかった。そのため「朗誦朗讀」の必要が起って、「ホームル」は「イリアツド」を朗誦してギリシヤ列國を遍歴した。

今日のように印刷が普及し黙読される世となつては、

朗読の必要がなくなったという者もあろう。しかしそれは読法に「素讀」があることだけを知つて他の方法があるのを知らないのである。読法に三種ある。機械的読法、文法的読法、論理的読法である。黙読はこの三種を無言で行うのみなので別目とはしない。

機械的讀法とは俗にいふ素讀なり

文章の句読にさえ注意せずさらさらと読み流すのである。

文法的讀法は所謂朗讀法の本領にして又の名を正讀法ともいふべし發音、法に合ひ句讀、宜しきを得讀聲の緩急抑揚、よく文意と調和して正當なるが故なり即ち文章を朗讀して他人の聽覺に訴へ彼れの視覺に訴へたと同様の感銘を生ぜしめんと力むるもの也

日本外史、源氏物語、平家物語、太平記などは、すべてこの法で読むべきである。

予が謂ふ論理的讀法は歐米に謂ふ「エロキューション」より脱化したるものなり

すなわち美読法である。つまり単に文義を明瞭にして面白くするだけでなく、

其文自作ならば自家の感情を朗讀の間に活動せしめ若し又他人の文ならば其原作者の本意をして朗讀の間に活動せしめ若し又院本中なる人物の臺辭ならば其人物の性情をして朗讀の間に躍如たらしめんと欲するものなり

文の品、質、躰、格にも注意し、文が悲壯ならば読む声も悲壯に、文が優美ならば読む声も優美に、文の情、声の抑揚高低弛張に注意するのである。文法的読法のように智だけで読まず、智と情とによって読もうとするのである。(以上、一回目)

論理的讀法は専ら言文一致に近き文章に於てすべし就中傑作の脚本をよしとす

そして文の結構、句切り、段切り、テニハの懸り結びなどの文法をよく知り、文の品質、体格、褒美、貶難、冷笑、諷刺などの修辭の原理をもよく知らなければならぬ。

このような論理的読法は、觀察力、適応力、表白力などを鍛練させて智情意の三機能を鋭敏にし、節奏文、韻文を創作しようとする者に裨益し雄弁を鍊磨する助けとなるなどの利益がある。しかしこれらは予の望む利益ではない。

予はむしろ論理的讀法をもて人性研究法の一端とし延いて人間研究法の第一階とせんことを妄想する者なり

君子の言葉を読もうとすれば君子の心を知らなければならぬ。シャイロック、ポーシャ、マクベス、ハムレット、オフエリアを読もうとすれば、皆その心を知らなければならぬ。

是豈人間の性情を探り天命の一端を窺ひ知るものに近からずや

このような目的で論理的讀法を唱えるのであるから、脚本に重きを置くのである。

このようにいうと俳優の境界に墮落するのかもしれない。しかし俳優は聴覚だけでなく見覚にも訴

える。そのために扮装し身振り手真似し、台辞を暗誦する。

朗讀者は然らず専ら聴む者をして目のあたり其人の聲を聴くが如く感ぜしめんと欲するが故に一に其聴覺に訴ふる也故に假裝粉粧せざるべきはいふも更なり身振せず手真似せずまた敢て暗誦せんとせざるなり是我謂ふ美讀法の歐米の「エロキューション」と相異なる要點なり。

欧米のエロキューションは暗誦するので、手持無沙汰となつて身振り手真似をすることになるのである。

俳優と朗読者は目的に於ても異なる。俳優は公衆の褒美を求め、自家の芸名を高くしようとする。朗読者はいかに人性の骨髓を探り得たか、人情を解し得、これを活現し得たかを聴く者の感銘の多少によつて鑑定し、かねては善悪邪正美醜などの別を伝えて聴く者に感悟するところがあるようにしようとする。

人間全軀を主とするが故に朗讀の法を研究す朗讀を巧たくみにして我名を得んとはあらず公衆に悦ばれ

んともあらずあくまでも我は客にして人間が主ならばなり

しかしその台本はいかにして得るか。我が古来の文壇に格好の台本はない。結局、石橋忍月氏がかつて論じたように梨園の便宜に泥まない文学的ドラマが成るのを待つしかない。

此に於て平性情讀法の基礎を作りて豫め此等文園的ドラマの來降に準備せんが爲に向迎の席むしろを設けざるを得ざる要あり

文園戯曲を俳優が演じない場合、作者は失望しよう。我所謂朗讀法の本願は人性研究にありと雖も其第二の誓願に至りては此欠乏を補ふて未來のシエークスピヤギョーテの説明者となり批評家となり兼て天命解釋の一助手とならんとするにあり  
以上が逍遙の「讀法を興さんとする趣意」の概要である。

この論説の第一の意義は、將來の文学的脚本の出現に備えてそれが上演されない場合の代替手段として、

その朗読法を確立して置こうという理念が表れている点である。これは単なる演劇理論家に止まらず、その実践家でもあった逍遙の面目躍如たるものがある。従来、新脚本待望の声は多くの論者によって唱えられたが、この朗読といったような具体策を伴ったものはないであったのである。その理念的意義は明らかであろう。

第二の意義は、これに相関連するが、この朗読論がその実践活動たる朗読研究会の事実上の理念的基礎となっている点である。そして更にこの朗読研究会がいわゆる新劇の発足、すなわち文芸協会の発足に繋がって行った点から見て、新劇発足への最初の具体的な実践活動の理念的基礎ともなったと見られる点である。もちろん逍遙はこの時点では、以上のような新劇の発足を意識していた訳ではなかった。しかし後代を含めて歴史的に眺める時、以上のようにいえるのである。

第三の意義は、論理的読法の目的の第一に、人間研究法ということが上げられている点である。各登場人物の言葉を読もうとすればその心を知らなければなら

ない。これは人間の性情を探り天命の一端を知るといふことに近いのではないかと論じている。

これは味読ということであろう。これは確かに論理的読法の優れた点であろう。このような味読の方法は逍遙によって初めて唱えられた。そこに理念的意義が認められる。

第四の意義は、朗読法を機械的読法、文法的読法、論理的読法と三分類している点である。このうち特に論理的読法は欧米のエロキューションから脱したものとわざわざ断っていると知られるように、逍遙独自の考察から生まれたものであろう。もっとも鷗外は素読(常声)、レクタチオン、デクラマチオンという分類理念を既に表明している。しかしこのような直輸入的でなく日本の事情に合せて編成し直したところに理念史的意義が認められる。

以上、逍遙の朗読論の意義を四点に分けて論じたが、否定的評価も加えなければならない。その一は、俳優について公衆の褒美を求め自家の芸名を高くしようと

する、といった一面でしか言及していない点である。

もちろんこれは論理的読法がいかに俳優とは異なるかということ**を強調する文脈の中で行われて居り、俳優の境界に墮落するの**かという世間の非難に予め答えようとする余り、このような俳優の一面のみを強調する結果となつたのであろう。しかし、俳優もまた逍遙のいう論理的読法がセリフ術において必要であることは論を待たないであらう。

その二は、やはり論理的読法の条で、その目的の一に善悪邪正美醜などの別を伝える、といっている点である。これは逍遙の教化的もしくは功利的理念がはしくなくも表れたものであろう。

しかしながら以上二点の否定的評価は、いわば瑕瑾といえるもので、前記の四点の意義はそれに拘らず大きいといえよう。<sup>註(二)</sup>

### (三) 結語

では以上の朗読論を回顧しつつ、総合的な意義を考察したい。

第一の意義は、逍遙によって、将来の文学的脚本が上演されない場合の代替手段として、朗読法の確立すべきことが唱えられ、かつその朗読論がその実践活動である朗読研究会の理念的基礎となつたと見られる点である。これまでも文学としての脚本を最も大切に考える理念は、殊に明治二十年代に入ってから盛んであったが、今回はそれに加えて朗読という具体案を伴っているところに時代を一步進めたものが見られる。更には朗読研究会はいわゆる新劇の前段階であつたのであるから、朗読論はいわゆる新劇の時代へ展開する萌芽を示すものともいえよう。この点にも逍遙の先覚者としての面目が躍如としているといえよう。

第二の意義は、朗読論争の当事者でない鷗外が「レ

「チタチオン」「デクラマチオン」などの西欧理念によって朗読論争を判定し、理念的に整理した点である。この二つの西欧理念がいかに優れた朗読論であったかは、この朗読論争の誤りを悉く論破し、正しく整然と整理し尽してしまつたことによつて、充分首肯されるであらう。

以上の朗読論の意義は、大局的、俯瞰的に見るならば、以上二点に集約出来る。鷗外が純理念的に、逍遙が理念と実践を兼ね備えた形でという風に、この朗読論に於いても両者の特質がよく表れている。この分野に於いても二人はパイオニアであつた。

註(一) 以上のところで鷗外はこの論争の経過を説明している。その中で鷗外は、この「二氏の争を惹起し、讀賣新聞の雜報」は、饗庭君が國民之友に記されたものと同じものと述べている。この記述に相当する雜報は、先の咄々生の最初の論難が載つたと同じ二十四年二月十二日付の、同じ

第二面に「朗讀會」と題されて載っている。従つてこの記事が論争を「惹起し」たというのは鷗外の勘違いで咄々生はこの雜報以外の別の手段で専門学校の朗読一件を知つて論難したことになる。(もちろん先述の國民之友の篁村の論説は、朗読一件を知らせたものではない。) その別な手段というのも、おそらく新聞記者らしい巷間の取材によつたらしいことは、逍遙の次のような証言があることによつて知られる。すなわち、前記の朗読研究会で篁村とその脚本を朗読する約束をしたところ

此事其當日に先だちて世間に漏れ太早計の徒ありて我徒を難じ文學亡國云々とさみしぬ(後掲、二十四年四月十三日発行『國民之友』所載、「讀法を興さんとする趣意」)

なお前掲、河竹繁俊、柳田泉両氏著『坪内逍遙』も、朗読会の「開催の趣きが新聞に報ぜられた翌日」に、咄々生の投書が『讀賣新聞』に発

表されたと述べている。この開催を報じたという記事も、内容的に見て同じ「朗讀會」と題された雑報である。内容的に見てそうであるばかりでなく、『讀賣』の前日つまり二月十一日付はもとより、その周辺も含めた『郵便報知』『東日』『東朝日』『時事』『日本』『朝野』などにも、朗読会の開催を報じた記事が見当たらないからである。従って、開催の趣が報ぜられた翌日に咄々生の投書が発表されたというのは誤りと思われる。開催の報と咄々生の投書は、同日付の同一紙面に載ったのである。

なおこの「朗讀會」という記事は、鷗外がいうように国民之友の篁村の記事と趣旨が似ているので、本稿では紹介しなかった。

註(二)以上の逍遙の朗読論に対して、鷗外は次のように評している。二十四年九月二十五日発行『文學評論』「其二」「おなじ人の朗讀説」がそれであ

る。\*

逍遙子のいう論理的読法の、文の深意、人物の性情を探る作業はその精神的部門である。逍遙子の主眼は論理的読法の精神的部門にあるであろう。逍遙子のいう機械的読法すなわち素読の最低級のものはまだ芸術の境に入らないものである。素読でも決った高低の調がなく真の節のないものを「拍子ある素讀 (Rhythmisches Lesen)」として、ハルトマンは芸術の初歩とした。この節を「行調」をつけて読めば「美音讀 (phonisches Lesen)」となるであろう。美音読に性情を表したものを「表情讀 (Mimisches Lesen)」といて、純粹な芸術の境に入るものである。表情読を更に分けて「レクタチオン (Recitation)」と、「デクラマチオン (Deklamation)」とする。

逍遙子が朗讀法として行はむとする論理的讀法は即表情讀なり。逍遙子は吉野拾遺、太田道



灌などの表情讀をなすに當りて、よもや何處までも情を縦<sup>は</sup>ちて、生且淨丑それ〴〵に聲を發するには至らざるべきを以て、われは其表情讀の「デクラマチオン」にあらざるを知る。その表情讀は蓋「レチタチオン」ならむ。

逍遙子はレチタチオンを學術視し、デクラマチオンを演芸視しているが、これらは双方共、芸術なのである。また逍遙子が論理的読法の下に置いた文法的読法は美音読である。

以上が逍遙の朗読論に対する鷗外の批評の概要である。

この論説は逍遙のいうところを鷗外の用語例によって、解釈し直すという彼一流のやり方が表れているという以上の意義は見出せない。逍遙の主眼を論理的読法の精神的部門と解し、機械的読法すなわち素読が拍子ある素読に、そして美音読に、そして表情読に展開する。この表情読を更にレチタチオンとデクラマチオンに分ける。誠に論理整

然としているといたいところだが所詮、朗読を行うのは生身の人間である。これらを論理上は理解し得たとしても実行上截然と区別し得るであろうか。また区別し得たとしてもそこにかなる意味があろうか。朗読法の分類は逍遙のいう三分類で充分と思われる。これを要するに、鷗外のこの批評は徒らに理論に走って理論倒れに終り、逍遙のいうところを強引に自分流に解釈しようとした嫌疑があると思う。

※ 「おなじ人」とはもちろん逍遙のことで、「其

一」に、「逍遙子の新作十二番中既發四番合評、梅花詞集評及梓神子」と題する論説があるからである。

○ 引用文の旧漢字は原文のままを原則としたが、今日の常用漢字と近似するものは常用漢字に改めたものもある。